

猪名川町の木喰仏 ― 調査概報 ―

栗 田 美由紀

はじめに

木喰仏とは木食上人（木喰五行明満 一七一八―一八一〇）によって刻まれた一連の木造彫刻のことである。全国各地に八〇〇体以上の作品が伝存し、民芸運動の創始者でもある柳宗悦氏によって世に初めて紹介された。その形式にとらわれない自由な作風は、同じく江戸時代に数多くの独創的な彫像を遺した、円空（一六三二―一九五）と好対照をなすとしてよく比較される。円空仏は「鉦はつり」といわれる彫法による荒々しい造形表現を特徴とするが、木喰仏の表面の彫成はなめらかで像容は全体に丸みをおび、面容も円満な相を示すものが多い。また、その独特の面容の表現から微笑仏の名でも親しまれている。

兵庫県川辺郡猪名川町にはこの木喰仏二六軀がほぼ当初のままの姿で伝存しており、今回これらの調査を行う機会を得たので、その概要をここに報告するものである。調査期間は一九九八年一月一三―一

七日および二〇日の五日間、調査は猪名川木喰仏詳細調査団（代表 光森正士先生〔本学教授〕、顧問 水野正好先生〔本学学長〕、調査員 永井洋之・原 洋一・堀 純子・松本有香子〔以上、本学大学院生〕・栗田美由紀）が行い、資料の整理にあたってはさらに雄山純江・山口直子〔以上、本学大学院生〕両名の協力を得た（所属は調査当時）。

なお、今回報告する木喰仏二六軀は、本調査の後、一九九九年四月に兵庫県重要文化財として指定されている。

木喰上人について

木喰は享保三年（一七一八）に現在の山梨県西八代郡下部町古閑字丸畑に生まれた。二二歳で出家、四五歳のとき相模国大山で木食観海上人より木食戒を受ける。木食戒とは肉類および五穀を断ち、木の実・草の根などを食べて過ごす修行である。その後、安永二年（一七七三）五六歳のときに「三界無庵無仏 木食行道」を名乗り日本廻国の旅へ

出立、以後三〇数年間全国を巡錫し、その足跡は北海道中部から九州南端にまで及んでいる。

木喰の造像活動は北海道松前に安永七年（一七七八）の銘をもつ子安地藏があることから、木喰六一歳のこの頃より始まったものと考えられている。以後、寛政六年（一七九四）七七歳のとき、日向国分寺の本尊五智如来の完成の頃より「天一自在法門 木喰五行菩薩」を名乗り始め、さらに文化三年（一八〇六）八九歳のとき、丹波清源寺において十六羅漢像を製作中の霊夢によって「神通光明 明満仙人」と名を改めながら、文化七年（一八一〇）九三歳で入定するまで各地で活発な造像活動を繰り広げた。

猪名川の木喰仏

木喰が猪名川の地において造像活動を行ったのは九〇歳、文化四年（一八〇七）三月下旬から同年七月初旬までの三ヶ月余りのことである。その間に三三軀の仏像・神像彫刻を製作したことが知られ、現在これらの内の二七軀が猪名川町内の毘沙門堂、天乳寺、東光寺および個人宅に所在している。今回、調査対象としたのはこれら二七軀の内ほぼ当初の像容をとどめる二六軀で、像背面には文化四年三月二六日から同年七月四日までの造像銘がある。

すべて一木造、内割りは一切施さない。光背がつく場合は木喰独特

の円形の頭光とする。それは三区に分かれ、最外縁第一区には放射状に山形の彫り込みを入れた光芒をあらわし、第二区には光明真言を墨書、第三区は全面墨彩あるいは素地とする。光明真言は大日如来の真言、または一切諸仏菩薩の総呪ともいわれ、死者の菩提回向および現世の増益息災のために用いられる真言である。この頭光の形式は寛政一二年（一八〇〇）、木喰八三歳の頃の作品よりみられるようになり、享和二年（一八〇二）に完成した木喰生涯最大の群像である四国堂の諸像において定型化したとされる。

背面全体にわたって墨書があり、すべての墨書銘中に「日本千タイノ内」あるいは「日本二千タイノ内」の語が確認される。これらは木喰が当時千体彫仏、のちには二千体彫仏を目指して造像に励んでいたことを示すものである。「日本千鉢の（タイノ）内」の文字がみられるようになるのは、寛政九年（一七九七）閏七月、木喰八〇歳のときの造像、山口県美祿郡秋芳町観音堂所在の毘沙門天像の背面墨書中からで、以後、頻出することから、木喰の千体彫仏はこのころ発願されたと考えられている。

このほか墨書中には加勢大工與清の名が頻出する。與清とは越後国長岡の青柳清右衛門のことであり、「大工與清」の文字は丹波清源寺の十六羅漢像製作中、釈迦如来像よりみることができる。文化三年一二月から翌四年七月頃にかけて木喰に随行していたと思われる人物である。

また、今回の調査によって、背面に像の配置を示す符号を記しているものや像底に墨線が縦横に残るものがあることが確認された。この墨線は製作時の木取りの際の基準線と考えられる。
以下、造像順に個々の作品について概略を述べる。

毘沙門堂 (猪名川町上阿古谷字垣内二六〇)

1 七仏薬師像

一木造(檜カ) 素地・一部彩色 六軀

いずれも蓮華座上に坐し、衲衣を通肩に着し、頭光を付す。頭頂に髻を結び、頭髮は肩に丸く溜まるように表現する。頭髮、眉は墨彩、目は輪郭および瞳を墨描きし、口唇に朱彩を施す。頭光は光明真言を墨書するほかは素地とする。材は丸太を縦に二分割したもので、像底は扁平な半円形をなし、横張に比して奥行は非常に浅い。

明治期に盗難にあったため、現在、宝月智厳光音自在王如来を欠く六軀が伝存する。本群像は木喰が猪名川の地において初めて手がけた作品であり、その像容は文化四年二月に造像された京都府船井郡蔭涼寺の薬師三尊像に近似する。総高はいずれも1m近くあり、五〇〜七〇cmの像が多い木喰仏中では大型のものといえる。

背面頭光部の上端には「東方」「中」「一」「二」「三」「四」などの文字や記号が記されており、これは像の配置を示したものと考えられる。それによれば中央に薬師瑠璃光如来、その東側に善名称吉祥王如来、

宝月智厳光音自在王如来、金色放光妙行成就如来の三軀、中尊をはさんで反対側に無憂最勝吉祥如来、法海雷音如来、法海勝慧遊戯神通如来の三軀を配することとなる。『阿沙婆抄』には七仏薬師について「中臺大佛像、左上方に善名稱、次に寶月、次下に金色、右上方に無憂、次に法海、次に法海勝なり」との記述があり、符号に基づく配置と矛盾しない。現在の毘沙門堂においては、七仏薬師像はこれら記号とは無関係に堂内左右の仏壇に三軀ずつ分かれて安置されているが、造立当初はおそらく薬師瑠璃光如来像を中心に左右に三軀ずつ符号に従って像が安置されていたものと考えられる。

1-1 善名称吉祥王如来坐像(図版1)

文化四年三月二六日 総高 九七・六cm

右手は胸前、左手は腹前に置き、それぞれの手に宝珠を持つ。面貌は木喰仏独特の円満相で、眉と目は山形に弧を描き、口元に笑みを浮かべる。額には墨点で白毫をあらわす。

木心に近い材を使用しているが、像底部は虫損が甚だしく木心の有無は確認できない。

頭光には光明真言「三」字を墨書する。

1-2 金色放光妙行成就如来坐像 (図版2)

文化四年三月二十六日 総高 九八・九cm

善名称吉祥如来像と同日の造像銘を持つ。両手を軽く握り、右手をやや上にして腹前に置く。両手には持物を挿していたと思われる柄穴が残るが、現在、持物は亡失する。面貌は木喰独特の円満相で、眉と目は山形に弧を描き、口元に笑みを浮かべる。額には墨点で白毫をあらわす。

像底中央背面際に木心がある。

頭光には光明真言二四字を墨書し、背面墨書では尊名を「金色寶光妙行成就王如来」とする。

1-3 無憂最勝吉祥如来坐像 (図版3)

文化四年三月二十七日 総高 九五・六cm

両手を胸前にあげ、×字を刻んだ掌を見せる。面貌は木喰独特の円満相で、眉と目は山形に弧を描き、口元に笑みを浮かべる。

像底中央背面際に木心がある。

頭光には光明真言二三字を墨書し、背面墨書では尊名を「無憂最勝吉祥王如来」とする。

1-4 薬師瓔珞光如来坐像 (図版4)

文化四年四月三日 総高 九三・一cm

胸前に薬壺を捧げ持つ。面貌は眉は山形の弧を描き、目は伏目として目尻を上げ、口元にかすかに笑みを浮かべる。額には墨点で白毫をあらわし、薬壺は全体を墨彩とする。

像底には墨線が縦に一本残る。木心に非常に近い材を使用するが、像底に木心はみられない。

頭光には光明真言二三字を墨書し、背面墨書では尊名を「薬師瓔珞如来」とする。

1-5 法海雷音如来坐像 (図版5)

文化四年四月三日 総高 九七・六cm

右手は宝珠を持ち胸前に、左手は軽く握り腹前に置く。左手には持物を挿していたと思われる柄穴があるが、現在持物は亡失する。面容の表現では眉は他の像と同様山形に弧を描くが、目は大きく見開く。口は固く引き結び口角を下げ、顎には四本の皺を縦に刻む。額には白毫を墨点であらわす。

木心に近い材を使用するが、像底に木心はみられない。

頭光には光明真言二四字を墨書し、背面墨書では尊名を「法海雷音如来」とする。

1-6 法界勝慧遊戲神通如来坐像 (図版6)

文化四年四月四日 総高 九七・四cm

両手に一つずつ宝珠を持ち、右手は胸前、左手は腹前に置く。右手に持つ宝珠の頂部には三本の筋を刻み、左手の宝珠はほぼ球形をなす。面容は木喰仏独特の円満相で、眉と目は山形に弧を描き、口元に笑みを浮かべる。額には墨点で白毫をあらわす。

像底中央には墨線が縦に一本残る。木心に非常に近い材を使用するが、像底に木心はみられない。

頭光には光明真言二四字を墨書する。また、背面墨書中には「アヲヤナギ與清」の文字みえる。「アヲヤナギ」と記されているのは本像のみであり、これによって木喰の最晩年に同行し、加勢大工として関与した「與清」が青柳清右衛門であることが牧野氏によって明らかにされている。

2 明滿仙人自刻倚像(図版7)

一木造(檜カ) 素地・一部彩色 一軀

文化四年四月九日 総高 八八・八cm

台座上に倚坐し、腹前で手を重ねて右手に数珠を持ち、頭部には頭光を付す。顎髭をたくわえ、眉と目は山形に弧を描く木喰独特の円満相とする。眉・瞳を墨描き、口唇は朱彩、数珠には墨彩を施す。頭光の第一区の山形の彫込みは一つおきに墨彩、第三区は全面墨彩とする。台座は長六角形で正面側三面にのみ山形の斜文を刻む。

像底には墨線が縦に等間隔に三本、横中央に一本残り、像底中心よ

りやや右後方に木心がある。

頭光第二区に光明真言二三字を墨書し、背面墨書では尊名を「明滿仙人自刻藏」とする。

木喰が自刻像に頭光をあらわすようになるのは文化元年(一八〇四)の長岡市宝生寺の自刻像からである。これはすでに開悟しているとの自覚を示すものと思われ、以後すべての像に頭光が付されている。

文化四年の銘を持つ自刻像は、京都府に二軀(八木町蔭涼寺、丹波町福満寺)、猪名川町に本像を含め三軀、計五軀が現存する。京都の二軀の像はいずれも木喰が猪名川を訪れる以前に造像したもので、台座は荷葉座とし、持物は何もとらない。これに対し猪名川の三軀はいずれも山形の斜文を刻んだ六角形の台座に坐し、右手に数珠を持してあらわされる。猪名川を出立して以降、木喰は自刻像は製作していないため、本像を含め猪名川に伝存する三軀の自刻像は木喰最晩年の自刻像の様式を示すものといえる。

天乳寺 (猪名川町万善寺宇寺の通二九)

1 得大勢至大菩薩立像(図版8)

一木造(松カ) 墨彩色・一部素地 一軀

文化四年四月二〇日 総高 一〇三・九cm

蓮華座上に立ち、円形の頭光を付す。高い宝髻を結び、胸前で合掌

する。眉は山形に弧を描き、目は伏し目として口元に笑みを浮かべる。墨書のある頭光第二区および背面を除いて全体を墨彩色とする。

頭光第二区に光明真言二四字を墨書し、背面墨書では尊名を「徳大勢至大菩薩」とする。

聖観世音大菩薩立像と対をなす像である。通例、阿弥陀如来の脇侍として製作される両像であるが、主尊となる阿弥陀如来像が当時天乳寺に存在していたかどうかは不明である。

2 聖観世音大菩薩立像（図版9）

一木造（松カ） 墨彩色・一部素地 一軀
文化四年四月二日 総高 一〇三・四cm

蓮華座上に立ち、円形の頭光を付す。ねじりの入った高い宝髻を結い、腹前で蓮台を捧げ持つ。眉と目は山形に弧を描くように表現され、口元には笑みを浮かべる。墨書のある背面および頭光第二区を除いて全体に墨彩を施す。

像底の中心よりやや右寄りに木心があるほか、頭光第二区に光明真言二三字を墨書する。

得大勢至大菩薩立像と対をなす像である。

3 明満仙人倚像（図版10）

一木造（松カ） 素地・一部彩色 一軀

文化四年五月一八日 総高 九〇・五cm

台座上に倚坐し、円形の頭光をつける。剃髪で目と眉は山形に弧を描き、口元に笑みを浮かべる独特の円満相で、顎には鬚をあらわし毛筋を刻む。手は右手を上にして腹前に置き、右手に数珠をもつ。台座は六角形、正面側三面に山形の斜文を刻む。眉を墨彩、瞳を墨描きし、頭光第三区および持物（数珠）にも墨彩を施す。

像底には墨線が縦に等間隔に三本、横中央に一本残り、それぞれ直交する。像底の中心よりやや後方に木心がある。

頭光第二区に光明真言二三字を墨書、背面墨書では尊名を「明満仙人躰」とする。

鳥山あさゑ氏藏（猪名川町紫合字街東）

一戎大黒天立像（図版11）

一木造（松カ） 素地・一部彩色 一軀
文化四年五月二〇日 総高 五二・七cm

伎上に袋を踏む大黒天、その左に鯛を抱える戎の姿をあらわす。大黒天は木喰独特の円満相に円形の頭光をつけ、右手に小槌、左手に袋の口を掴む。大黒天の頭巾、眉・沓および戎の烏帽子は墨彩、口唇と頭光部は朱彩とする。

背面墨書中には俳句「大こくも 七ふくうつて とりさかな」¹⁾め

でたいを おさへてひとつ わかえびす」の二句があるが、これと同様の句は木喰八三歳のときの俳画にも添えられている。

東光寺 (猪名川町北田原宇寺の前四五二)

1 十王像および葬頭河婆坐像・白鬼立像

一木造(松カ) 素地・一部彩色 一二編

十王像はいずれも正面側三面に山形の斜文を刻んだほぼ六角形をなす台座上に坐し、裳襟のついた道服を着して頭上に冠をいただく。一二編ともに肩に墨彩、瞳は墨描きし、口唇に朱彩を施す。

文化四年六月二日から同年六月二日までの造像銘があり、木喰作の群像彫刻としては現存する最後の作品である。

像容には頭髮に毛筋を刻むものと、毛筋を刻まず墨彩のみとするものの二種がある。前者は六月一二日の造像銘をもつ白鬼以前に製作された像に共通する特徴であり、後者はその後六月一四日の造像銘をもつ十王尊坐像の三(伝 宋帝王)から後に製作されたものにみられる特徴である。

十王像の作例としてはこのほかに浜北市徳泉寺(寛政一二年 一八〇〇)の十王尊および葬頭河婆像(一一編)、柏崎市十王堂(文化元年 一八〇四)の十王尊および葬頭河婆(一二編)などがあげられる。しかし、群像に白鬼を含めているのは東光寺の本群像のみである。

1-1 琺瑯大王坐像(図版12)

文化四年六月二日 総高 六五・七cm

冠の正面に「王」の字を陽刻し、頭髮には細かく毛筋を刻む。眉を寄せて目を見開き、鬚をたくわえ、齒をむき出して笑う。両手は軽く握って膝上に置く。右手に柄穴があるが、現在持物は欠失する。胸には蕨手状の裝飾が刻まれる。

像底には墨線が縦に三本、横に一本残り、像底中央左寄りから頭頂に向かって木心が通る。

1-2 十王坐像の一(伝 秦広王)(図版13)

文化四年六月三日 総高 六〇・五cm

頭髮に毛筋を刻み、眉根を寄せ、眉間に皺を刻む。目は大きく見開き、口は堅く引き結ぶ。両手は軽く握り腹前に置く。右手には持物を挿していたと思われる柄穴があるが、現在持物は欠失する。また、冠左右にも笄を挿していたと思われる柄穴があるが、笄も現在では左右とも欠失する。

像底には墨線が縦に三本、横に一本残り、像底右側のやや背面寄りから頭頂に向かって木心が通る。

1-3 葬頭河婆像(図版14)

文化四年六月六日 総高 六〇・一cm

114 十王坐像の二(伝 初江王)(図版15)

台座上に右膝を立てて坐す。右手は五指を伸ばし、左手は衣を掴んでそれぞれの膝の上に置く。頭髮は両肩に垂れ、ねじるように毛筋を刻む。上半身は裸形で下半身にのみ衣をまとう。額に皺を刻み、眉は山形の弧を描き、眉根を寄せる。目を見開き、齒をむき出して笑う。眉、瞳、下瞼の内側を墨彩し、口唇には朱彩を施す。

像底には墨線が縦に等間隔に三本、中央横に一本残り、像底ほぼ中央に木心がある。

背面墨書中には「父母ホタイノタメ」とあり、父母の菩提を弔う一文が記されている。

114 十王坐像の二(伝 初江王)(図版15)

文化四年六月八日 像高 六四・三cm

頭髮に細かく毛筋をあらわし、眉根を寄せ、眉間に皺を刻む。目は大きく見開き、口は固く引き結び、顎にも皺を刻む。手は右手を上組んで腹前に置く。右手には持物を挿していたと思われる柄穴があるが、現在持物は欠失する。冠左側面にも筭を挿していたと思われる柄穴が残る。冠の筭、頭髮、眉、目等を墨彩し、口唇には朱彩を施す。

像底には墨線が縦に二本、横中央に一本、左隅に斜めに一本残り、像底中央やや右寄りから頭頂部にかけて木心が通る。

背面墨書中に「ボタイノタメ」の文字がある。

115 白鬼立像(図版16)

文化四年六月二日 像高 六一・三cm

岩座上に立ち、右手には大きくねじりの入った如意を持ち、左手は軽く握り腰にあてる。上半身は裸形とし、腰に裳のみをまとう。頭部に二本の角をあらわし毛筋を刻む。眉根をつり上げ、目を大きく見開き、口は横一文字に固く引き結ぶ。眉および如意に墨彩、瞳は墨描し、口唇に朱彩を施す。

両足の間をくりぬき、右足脛部に埋木がある。台座底部ほぼ中央に木心がある。

116 十王坐像の三(伝 宋帝王)(図版17)

文化四年六月一四日 像高 五九・一cm

両手を衣に隠し、右手を上組んで腹前に置く。冠は大きく頭髮に毛筋は彫出ししない。目と眉はつり上がり、口は結んで笑みを浮かべる。右手に持物を挿していたと思われる柄穴があるが、現在持物は欠失する。なお、本像の冠にのみ柄穴がなく、筭がつかない構造になっている。

像底には墨線が縦に一本残る。丸太を縦に二分した材から彫出しており、像底に木心はみられない。

117 十王坐像の四(伝 五管王)(図版18)

文化四年六月一七日 総高 六一・三cm

両手は拳母軀に隠して組んで腹前に置く。半円形の持物を共彫りであらわす。頭髮には毛筋を刻まず、眉をつり上げ、目を見開き、口は左右に固く引き結ぶ。冠右側面に筭を挿していたと思われる柄穴がある。

像底中央部に墨線が縦に二本残り、像底中央よりやや正面側右寄りから頭頂に向かって木心が通る。

118 十王坐像の五(伝 變成王)(図版19)

文化四年六月一八日 総高 六〇・七cm

左膝を立てて坐す。左手は五指を伸ばし、右手は軽く握ってそれぞれの膝上に置く。頭髮には毛筋を刻まない。眉や山形に弧を描き、目は伏目、口は軽く結んで笑みをたたえる。右手に柄穴があるが現在持物は亡失する。冠の右側面につく筭は別材、左側面には柄穴のみが残る。

墨線が像底中央に縦に一本、正面側稜角に沿って横に一本残り、像底のほぼ中央から頭頂に向かって木心が通る。

背面墨書中に「父母ホ多いの多□」とあり、父母の菩提を弔う旨が記されている。

119 十王坐像の六(伝 太山王)(図版20)

文化四年六月一八日 総高 五八・六cm

手は右手を上組んで腹前に置く。眉は山形に弧を描き、目は見開き、口は結んで笑みを浮かべる。右手および冠両側面に柄穴が残る。それぞれ持物、筭を挿していたものと思われるが、現在それらは亡失する。

像底には墨線が中央に縦に一本、斜めに一本残り、像底中央背面よりから頭頂に向かって木心が通る。

背面墨書中に「父母」「タメニ」の文字がみえる。

1110 十王坐像の七(伝 平等王)(図版21)

文化四年六月一九日 総高 六〇・七cm

手は右手を上組んで腹前に置く。頭髮には毛筋を刻まず、眉と目は山形に弧を描くようにつくり、口元には笑みを浮かべる。冠の筭は別材、右手に柄穴があるが、現在持物は亡失する。

像底中央に縦に一本、正面側稜角に沿って横に一本墨線が残り、像底中央やや正面寄りから頭頂に向かって木心が通る。

背面墨書中に甲斐町の和名善内の菩提を弔う一文がある。善内とは甲府金手町の人で木喰の後援者であったといわれる。

1-11 十王坐像の八(伝 都市王)(図版22)

文化四年六月二〇日 総高 六一・一cm

左手は五指を伸ばし、右手は軽く握って腹前に置く。頭髮は彫出せず、眉根を寄せ、目を見開き、口は左右に引き結ぶ。冠の筭は別材を挿すが、右側の筭は折れて先を欠失している。右手には柄穴があるが、現在持物は亡失する。

像底中央に縦に一本墨線が残り、像底ほぼ中央から頭頂に向かって木心を通る。

背面墨書中に「サカミイセハラ ヒヤウクヤ 金次郎 大丈 ホタイノタメ」とある。相模伊勢原は木喰が日本廻国に向けて出立した地であるが、表具屋金次郎については明らかでない。

1-12 十王坐像の九(伝 五道転輪王)(図版23)

文化四年六月三日 総高 五六・五cm

両手は軽く握り腹前に置き、右手に巻子を持つ。頭髮には毛筋を刻まず、眉は山形に弧を描き、目は伏目とし、口元には笑みを浮かべる。巻子は共彫、墨彩とする。

像底中央に墨線が縦に一本残り、像底中央やや正面寄りから頭頂に向かって木心を通る。

背面墨書中に「毘八丈 ホタイノタメ」とある。毘八については不明。

2 明満仙人倚像(図版24)

一木造(杉カ) 素地・一部彩色 一軀

文化四年□月一四日 総高 一〇五・七cm

台座上で倚坐し、円形の頭光を付ける。右手に数珠を持ち、右手を上組んで腹前に置く。剃髪で眉と目は山形に弧を描き、口元には笑みを浮かべる。胸まで伸びた顎鬚をたくわえ、鬚には毛筋を刻む。台座は長六角形で、正面側三面にのみ山形の斜文を刻む。眉・持物(数珠)は墨彩、瞳を墨描きし、口唇には朱彩を施す。頭光最外縁第一区の光芒は一つおきに墨彩する。第二区には光明真言を墨書、第三区は全面墨彩とする。

像底には墨線が縦横に一本ずつ中央で直交するように残り、像底はぼ中心に木心がある。

3 立木子安観音像(図版25)

一木造(檜カ) 素地・一部彩色 一軀

総高 一一六・七cm

もとは境内の生木に彫り込まれたものであり、造像後、木が成長したため、像が幾分取り込まれている。現在は像の彫り込まれた根幹部のみが境内の観音堂に安置されている。

蓮華座上に立ち、左手に小児を抱き、右手は衣の一端を持つ。頭部には円形の頭光を付す。眉と目は山形に弧を描き、口元には笑みを浮

かべる。眉に墨彩、口唇に朱彩がわずかに残る。小児は両手で宝珠状の球を抱え、眉と目は山形に弧を描いて表現される。頭髮と眉および頭光第三区を墨彩とする。

木喰作の立木仏の作例としては、このほか防府市大楽院の南無観世音立像（寛政十一年「一七九九」）、柏崎市大泉寺の子安地藏菩薩坐像（文化二年「一八〇五」）などがあげられる。

個人蔵

松尾大権現倚像（図版26）

一木造（桧カ） 墨彩色 一編

文化四年七月四日 総高 四五・六cm

醸造の神とされる本像は文化四年当時、酒造業を営んでいた猪名川町内の個人宅に伝存する。

台座上で壺形の椅子に腰かける姿であらわされる。烏帽子を被り、鬚をたくわえ、両手は揃えて膝上に置く。眉と目は山形に弧を描き、口元には笑みを浮かべる。頭髮と鬚には毛筋を刻む。左手には現在柄穴に柄のみが残り、持物は欠失している。台座は長六角形で、正面側三面に山形の斜文を刻む。

墨書のある背面を除いて像全体に墨彩を施す。像底には墨線が縦に三本、横に一本残る。

本像においてとくに注目されるのは背面墨書中の「日本二千タイノ内 作」の文字である。「日本二千タイノ内 作」は木喰が猪名川の地を訪れる以前、京都府蔭涼寺の明満仙人倚像（文化四年正月二八日銘）に初めて記されるが、その後製作された諸像には未だ「日本千タイノ内」とある。一方、本像と同日の紀年銘を持つ像、玉津嶋大明神像（京都・河井寛次郎記念館蔵）、人麿大明神像（東京・日本民芸館蔵）、山邊赤人像（明石・無量光寺蔵）の三編のいずれにも「日本二千タイノ内」とあり、さらに以後に造像された像にも「二千タイ」の文字があることが確認されている。以上のことから、牧野氏がすでに指摘されているように、木喰は寛政九年（一七九七）頃発願したとされる千体彫仏を猪名川の地において成就、その後本格的に二千体彫仏をめざして造像活動を開始したと考えることができよう。

おわりに

猪名川を出立して以降、木喰は文化四年九月に諏訪の慈雲寺に阿弥陀如来像を、文化五年（一八〇八）四月には甲府の教安寺に七観音を造像したことが知られる。しかし、教安寺の七観音は昭和二〇年に焼失しており、現存するのは慈雲寺に阿弥陀如来像一編のみである。木喰はその後、文化七年（一八一〇）九三歳で入定したとされるから、今回ここに報告した猪名川町伝存の木喰仏は、群像として現存する木

喰最後の作品群ということになる。また他所への流出、像本体の欠損も少なく、製作当初の地に伝えられていること、しかも当地猪名川で一千体彫仏を成就、二千体彫仏をめざして活動を始めた地であるという点からも木喰の造像史上、重要な意味を持つ作品群であるということができよう。

謝辞

調査中は所蔵者の方々をはじめ、猪名川町教育委員会の喜多 護氏、住野 光信氏、井上知香氏、多くの方にお世話になりました。ここに記して感謝の意を表します。

〔付記〕

光森正士先生には奈良大学大学院入学以来、公私にわたりさまざまにお世話になりました。ここに記して深く感謝の意を表しますとともに、心より先生のご冥福をお祈り申し上げます。

参考文献

栗野頼之介『北摂における木喰上人』北摂郷土史学会 一九六七年
牧野正恭『九十才の微笑仏―猪名川木喰由来縁起―』兵庫県民芸協会
一九八一年

『別冊太陽 木喰の微笑仏』平凡社 一九八三年

『慈愛の造形 木喰の微笑仏 図録』朝日新聞社 一九九七年

〔追記〕

東光寺所蔵の明満仙人倚像について、その後、改めて赤外線撮影による調査を行った結果、造像の日付は「五月十四日」であることが明らかとなった。

背面墨書銘

文化四勿歲三月廿七日ニ 九十才(花押)

2 明滿仙人倚像

【毘沙門堂】

1 七仏薬師像

1-4 薬師瓊璃光如来

加清 與清丈

1-1 善名称吉祥王如来

日本千タイノ内 作

中 梵字(ハイ)薬師瓊璃如来

日月清明 明滿仙人

東 天下和順 神通光明

文化四勿歲三月廿六日ニ 九十才(花押)

方 梵字(ア)善名称吉祥王如来

1-5 法海誓音如来

日本千タイノ内 作

二 梵字(ター)法界雷音如来

日月清明 明滿仙人

文化四勿歲四月三日ニ

加セイ與清 大工

○ 東 天下和順 神通光明

文化四勿歲三月廿六日 九十才(花押)

1-6 法海勝慧遊戯神通如来

日本千タイノ内 作

三 梵字(ア)法海勝慧遊戯神

日月清明 カセイ大工 アオヤナギ與清

文化四勿歲四月四日□

明滿仙人 如来

日本千タイノ内 作

一 梵字(シラ)無憂寂勝吉祥王如来

天下和順 神通光明

日月清明 明滿仙人

日本之千タイノ内 作

梵字(ナ)明滿仙人自刻藏 九十才(花押)

文化四 勿歲四月九日ニ

【天乳寺】

1 得大勢至大菩薩立像

日本千タイノ内 作

梵字(サク)徳大勢至大菩薩

日月清明 文化四勿歲四月

廿日ニ

カセイ大工與清

2 聖觀世音大菩薩立像

日本千タイノ内 作

梵字(サ)聖觀世音大菩薩

文化四 勿歲四月廿一日ニ

カセイ

九十才(花押)

神通光明 明滿仙人

大工與清

1-3 無憂寂勝吉祥如来

日本千タイノ内 作

一 梵字(シラ)無憂寂勝吉祥王如来

天下和順 神通光明

日月清明 明滿仙人

3 明満仙人倚像

日本千タイノ内作 九十才(花押)

天下和順 木喰 神通光明

梵字(ナ) 明満 仙人 鉢 カセイ 六十才

日月清明 大工 興清

文化四郊歳五月十八日ニ

【鳥山氏藏】

一戎大黒天像

日本千タイノ内作

九十才(花押)

神通光明 明満仙人

六十才(花押)

□(白) カセイ大工 興清

梵字(マ) 大黒天神 大こく毛 七ふくうつて

文化四 とりさ可な

知歳五月廿日ニ

西ノ宮大神宮

めで多ひ越

おさへてひとつ

王可あひす

【東光寺】

1 十王尊および髻頭河婆、白鬼像

1-1 瓊魔大王

日本千タイ□□

作木喰(花押)

九十歳

天下和順 神通光明

父

梵字(カ) 瓊魔大王 明満仙人

日月清明 母 カセイ

文化四郊歳六月 大工

六十才

二日 興清(花押)

1-2 十王尊の一(伝 兼広王)

日本千タイノ内 九十才(花押)

天下和順 作木喰明満仙人

梵字(カ) 十王尊 神通光明

日月清明 カセイ 六十才

文化四郊歳 大工 興清(花押)

六月三日ニ

1-3 髻頭河婆

日本千タイノ内作

1-4 十王坐像の二(伝 初江王)

日本千タイノ内作

木喰 九十才(花押)

父母ホタイノタメ

天下和順 神通光明

梵字(バン) シヤウツカバ、 明満 カセイ大工

日月清明 仙人 六十才

文化四郊歳六月六日ニ 興清(花押)

1-5 白鬼

日本千タイノ内作

木喰 九十才(花押)

天下和順 神通光明

名善

梵字(カ) 十王尊 明満仙人

和內

日月清明 カセイ大工 興清

ボタイノタメ 六十才(花押)

文化四郊歳六月八日ニ

1-5 白鬼

興清

日本千タイノ内 九十才

梵字(ウン) 白鬼 神通光明

文化四郊歳

六月十二日ニ

明満仙人

116 十王坐像の三(伝 宋帝王)

日本千〇イノ内作

木食 九十才(花押)

天下和順 神通光明

梵字(カ)十王尊

日月清明 カセイ 六十才

大工 與清(花押)

文化四知歳六月十四日ニ

文化四知歳六月十八日ニ

119 十王坐像の六(伝 太山王)

日本千タイノ内 作

木食 九十才(花押)

天下和順 神通光明

梵字(カ)十王尊

日月清明 カセイ大工 六十才(花押)

文化四知歳六月十八日 與清

117 十王坐像の四(伝 五管王)

日本千タイノ内 作

木食 九十才(花押)

天下和順 神通光明

梵字(カ)十王尊

日月清明 カセイ 六十才

大工 與清(花押)

文化四知歳六月十七日ニ

1110 十王坐像の七(伝 平等王)

日本千タイノ内作 カイ町

木食 九十才(花押)

天下和順 神通光明

梵字(カ)十王尊

日月清明 カセイ 六十才(花押)

文化四知歳六月十九日ニ

2 明滿仙人倚像

日本千タイノ内作

木食 九十才(花押)

天下和順 神通光明木喰

梵字(ナ)明滿仙人藏

日月清明 カセイ大工 六十才

文化四知歳〇月十四日

サカミイセハラ 九十才(花押)

神通光明

ヒヤウクヤ

梵字(カ)十王尊 金次郎 明滿仙人

大工 大丈

ホタイノタメ

カセイ 六十才(花押)

日月清明 大工 與清

文化四知歳六月 廿日ニ

1112 十王坐像の九(伝 五道転輪王)

日本千タイノ内 作

木食 九十才(花押)

天下和順 神通光明

梵字(カ)十王尊

日月清明 カセイ 六十才

文化四知歳六月 廿二日ニ

118 十王坐像の五(伝 變成王)

日本千タイノ内 作

木食 九十才(花押)

天下和順 神通光明

梵字(カ)十王尊

ホ多いの多〇 明滿仙人

日月清明 カセイ大工 六十才(花押)

與清

日本千タイノ内 作

木喰

【個人蔵】

松尾大権現

日本二千タイノ内 木食

作 為□

九十才 (花押)

天下和順 神通光明

梵字 松尾大権現 明滿仙人

六十才

日月清明 カセイ大工與清

(花押)

文化四勿歳七月四日ニ

图版 1 善名称吉祥王如来坐像 毘沙門堂

图版 2 金色放光妙行成就如来坐像 毘沙門堂

图版 3 無憂最勝吉祥如来坐像 毘沙門堂

图版 4 葉師瑠璃光如来坐像 毘沙門堂

图版 5 法海雷音如来坐像 毘沙門堂

图版 6 法海勝慧遊戯神通如来坐像 毘沙門堂

图版 7 明滿仙人倚像 毘沙門堂

图版 8 得大勢至大菩薩立像 天乳寺

図版9 聖觀世音大菩薩立像 天乳寺

図版10 明滿仙人倚像 天乳寺

図版11 一戎大黒天像 鳥山氏蔵

図版12 琰魔大王坐像 東光寺

図版13 十王坐像の一（伝 秦広王） 東光寺

図版14 葬頭河婆坐像 東光寺

図版15 十王坐像の二（伝 初江王） 東光寺

図版16 白鬼立像 東光寺

図版17 十王坐像の三（伝 宋帝王） 東光寺

図版18 十王坐像の四（伝 五管王） 東光寺

図版19 十王坐像の五（伝 變成王） 東光寺

図版20 十王坐像の六（伝 太山王） 東光寺



図版21 十王坐像の七（伝 平等王） 東光寺



図版22 十王坐像の八（伝 都市王） 東光寺



図版23 十王坐像の九（伝 五道転輪王） 東光寺

図版24 明満仙人倚像 東光寺

図版25 立木子安観音立像 東光寺

図版26 松尾大権現像 個人蔵